

2023 年度Ⅱ期 個人企画

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	S・Y	Raffles Japanese Clinic/ Raffles Hospital	シンガポール	2023/10/23～2023/10/25

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	3年	学籍番号：*****	氏名：S・Y
--------	----	------------	--------

渡航先国：シンガポール
受入機関名：Raffles Japanese Clinic / Raffles Hospital
渡航先機関での受入期間： 令和 5年 10月 23日 ~ 令和 5年 10月 25日 (3日間)

1.スケジュール

10/22 関西国際空港発 チャンギ空港着

10/23 Raffles Japanese Clinic ブギス本院見学

大西洋一先生、林啓一先生、長谷川裕美子先生インタビュー

10/24 Raffles Japanese Clinic オーチャード分院見学

日暮真由美先生インタビュー

10/25 Raffles Hospital 見学

10/26 チャンギ空港発 関西国際空港着

2.目的

今年8月のこども家庭庁 母子保健課でのインターンを通じて医療制度、とりわけ母子保健制度に関心を持つようになった。そこで母子保健情報 DX の政策に携わった経験から、当該分野におけるデジタル化の必要性を感じた。

シンガポールは世界的なデジタル先進国で、日本に比べデジタル化が大きく進んでいる。また、日本・シンガポールの医療は世界的にトップレベルである。そこで、日本・シンガポール（星）の医療制度を文献調査したうえで、特に興味のある母子保健についてヒアリング・現地視察による課題抽出と比較を行う。そして日本の母子保健・小児医療分野が直面する課題に対する解決策となりうる方策をシンガポールの先進事例から検討するため、今回の留学を計画した。

3.内容・成果

[Raffles Medical Group]

シンガポールで80軒余りのクリニックと、総合病院である Raffles Hospital を運営している民間病院グループである。その他大阪、香港、上海、北京、ハノイ、ホーチミン、ブノン

ペンなど 12 都市でクリニックを運営している。

Raffles Medical Group HP : <https://www.rafflesmedicalgroup.com/>

[Raffles Japanese Clinic]

Raffles Medical Group の全面協力のもと、在星邦人の診療を行うために Raffles Hospital 内に設立された。病院とは独立しており、受付から薬の受け渡し・会計までをクリニック内で済ますことが出来る。また、クリニックでできないような検査は Raffles Hospital で連携して行うことが出来る。

(Raffles Japanese Clinic, Raffles Medical Group HP より)

【1 日目 : Raffles Japanese Clinic ブギス本院】

ブギス本院では、Raffles Japanese Clinic 統括院長である大西洋一先生にクリニックを案内いただき、その後大西洋一先生にシンガポールの国策の一つである「メディカルツーリズム」について、小児科の林啓一先生、産婦人科の長谷川裕美子先生にシンガポールにおける小児・周産期医療の現状などについてそれぞれお話を伺った。

<施設見学>

シンガポールにおいても出来る限り日本に近い医療を提供するための仕組みが多く見受けられた。例えば、スタッフは日本人・日本語を話すことができる方がほとんどであった。また、日本のアニメが放映されていた他、日本の雑誌が揃えられているなど患者に安心感を与えるための工夫があった。他にも、日本人にとってなじみの深い薬剤等を取り寄せていることも伺った。



診察室のベッド

診察室は日本の多くのクリニックと異なり、医師と患者が正対するような位置関係になっていた。診察室で患者が横たわるベッドは日本のそれよりも高さがある、イギリス式のものであった。これには医師が診察する上での腰の負担を軽減するという理由があり、元々植民地支配していたイギリスの影響を見て取ることができた。

<大西洋一先生インタビュー>

Raffles Japanese Clinic にて統括院長を務める大西洋一先生に、シンガポールの国策の一つである「医療ツーリズム」を日本に導入するハードルについてお話を伺った。医療ツーリズムとは、患者が医療を受ける目的で外国を訪れることである。

自費診療である外国人診療と保険診療の混合診療を導入することは、医療に競争原理を導

入することになる。日本でも一部導入されているが、導入がさらに進めば儲かる医師とそうでない医師で差が生まれ、儲からない医師は廃業の可能性が指摘される。一方で競合有意性獲得のために各医療機関がサービスの質を向上させることが期待できる。メリット・デメリットを慎重に検討しながら導入を進めていく事が重要であると伺った。



Raffles Japanese Clinicにて大西先生（写真右）と

<林啓一先生インタビュー>

小児科医の林啓一先生には母子保健情報を含めた PHR の管理状況についてお話を伺った。シンガポールでは健康情報は HealthHub などのアプリですべて管理されており、オンラインで確認することができる。政府系のデバイス・アプリであれば健診のデータ等も見ることが出来る。自身のこどもの健康情報を閲覧するには同意が不要である他、介護者など親族以外であっても同意を得ることが出来れば閲覧が可能であることが特徴である。また、日本でも増加する「医療的ケア児」を含む、ハンディキャップを持つ人に対する支援状況について伺った。

シンガポールは日本に比べると公的支援が薄く、多くの世帯で雇われるヘルパーが医療に関するトレーニングを受けずに医療的ケアを一部になっていることが課題であると伺った。これに対して、日本人が立ち上げたヘルスケアベンチャーである株式会社 TETSUYU（代表：武藤真祐）が専門家によるリアルタイムのモニタリング機能・チャット・コンサル機能によりケアギバーを医療的にサポートするサービスを提供していることを知った。

<長谷川裕美子先生インタビュー>

産婦人科医である長谷川裕美子先生には、在星邦人の妊産婦が抱える課題についてお話を伺った。

シンガポールにおける日本人コミュニティーは狭く、孤独さを感じる母親は少ないのでは

ないかという意見を聞いた。また、海外出張で滞在し生活水準が比較的高い世帯が多いことから、ヘルパーを雇う家庭が多いことも伺った。日本では母親学級は無料である場合が多いが、Raffles Japanese Clinic で行われる母親学級は有料であり、これはシンガポールの医療が奉仕ではなくサービスであるという側面に起因することを伺った。

【2日目：Raffles Japanese Clinic オーチャード分院】

オーチャード分院では、心療内科の日暮真由美先生に在星邦人が抱える心理的負担についてお話を伺った。

<施設見学>

設備は基本的にはブギス本院と同じだが、眼科と心療内科があることが特徴である。（訪問時眼科の先生は不在であった。）



オーチャード分院入口

<日暮真由美先生インタビュー>

日暮先生へのインタビューでは、在星邦人の母親が抱える育児上の心理的負担について伺った。その一つが、言語発達に対する不安である。在星邦人の家庭では日本語のほかに英語や中国語を並行して取り入れる世帯が多く、それゆえ子供の言語発達が遅れていないか心配する声があるという。

また、シンガポールでは一般的に産後約 3~4 か月で女性が復職するが、その際日中の育児をヘルパーが担うためヘルパーに子供を取られたような感覚に陥り精神的負担を訴える声もあるという。このようなシンガポール独自の伝統に対する精神的負担は他にもあり、例えばほぼ毎週親戚が集まるという風習に負担を感じる声もあると伺った。

【3日目：Raffles Hospital】

Raffles International Patients Centre の Ms.Su と Ms.Melly に Raffles Hospital を案内していただいた。Children Centre, Rehabilitation Centre, Heart Centre などを案内いただいた後、空いている病室を見学させていただいた。特に Children Centre のフロアには屋外に子供の遊び場があった他、フロア壁面には子供向けの絵が描かれていた。また、病児保育

機能は無く、病院はあくまで医療提供者でありその範囲外の事は行わないという明確な線引きがあることを学んだ。

基本的にどの Centre を訪れても、その中で受付から診察、会計まで済ませることが出来る。これは人件費や設備費などがかかる一方で、患者にとっては多くの階を行き来せずに済むため利便性向上につながっていると伺った。



病院を案内いただいた Ms.Su（写真左）と Ms.Melly（写真中央）と

4.考察

1 健康情報のデジタル化

自身・家族の健康情報をデジタル化することにより、シンガポールでは健康に対する日頃からの意識向上につながっている。一方で日本は自身や家族の健康情報デジタル化に関しては調査段階にとどまり、母子保健情報のデジタル化についても紙媒体での記録が主である。紙媒体での記録に関しては紛失の可能性が指摘されているため、デジタル化の重要性は高いといえる。しかし、プライバシーやセキュリティの問題については検討の余地が多く残されている。

2 医療的ケア児のサポート

医療的ケア児を持つ日本人の親は「働きたい・出かけたくても預け先がない」ことを課題として感じており、更に地域間格差も存在している。この課題に対しては、シンガポールのヘルパーのような外国人労働者を含めた担い手育成が重要ではないかと考える。彼らの医学的なサポートは、専門家による全面的なバックアップ体制を敷くことにより就労ハードルを下げることが出来ると考察する。しかし、シンガポールは英語や中国語といったメジャーな言語が公用語であるのに対し、日本語はマイナー言語であり言語の壁が存在する。加えて、東京都とほぼ同じ大きさのシンガポールに対し、日本は国土面積が大きく山で隔てられており人材の地域間格差が存在する。今後はこれらのハードルをいかにクリアしていくかが

課題であることが分かった。

5. 今後の抱負

シンガポールと日本の医療制度比較・母子保健における課題抽出を行った。日本は進んだ医療技術のわりにデジタル化が遅れており、一方シンガポールはデジタル化が進むが医療技術は日本に遅れをとっている。シンガポールの先進事例から、日本が将来これらの取り組みを導入した際の課題を先取りできるといえる。双方の長所を生かすことでいかに両国の医療の質向上につなげていくかを今後検討したい。

また、海外で働く医師のキャリアについてもお話を伺い、日本のみならず世界の医療に貢献することへの意欲が湧いた。今後は海外でのキャリアも視野に入れて、日々の勉強に励みたい。

6. 謝辞

留学にあたり、岸本忠三先生には多大なご援助を頂き、ここに感謝の意を表します。また、指導教官として終始多大なご指導を賜った、森口悠先生に深謝致します。**Raffles Japanese Clinic** 統括院長 大西洋一先生にはシンガポール視察において多大なるご支援をいただきました。中田研先生、小笠原理恵先生、並びに中谷大作先生には、多くのご助言を賜りました。ここに深謝の意を表します。最後に、国際未来医療学講座の皆様、**Raffles Medical Group** 様には、本研究の遂行にあたり多大なご助言、ご協力を頂きました。誠にありがとうございました。